

〔論 文〕

英国におけるパブリック・フットパスと地域振興 (part 3)

—国立公園や自然景勝特別保護地域と Walkers are Welcome 活動—

塩 路 有 子

はじめに

英国では、国立公園 (National Park) や自然景勝特別保護地域 (Area of Outstanding Natural Beauty, 以下 AONB) 内に、その豊かな自然環境からパブリック・フットパス (以下フットパス) が数多く存在する。さらに、そこに長距離歩行道であるナショナル・トレイルが通っている場合も多い。

2019年7月現在、国立公園内部、近接 (公園境界線の外5km未満)、近隣 (公園境界線から5km以上10km以内) に位置する Walkers are Welcome (WaW) タウンは合計25カ所あり、AONBでは39カ所ある。英国全土に105カ所¹⁾存在する WaW タウンのうち約3分の2がこれらの自然保護地域内部や近い距離に位置していることになる (表1)。そのため、自然保護地域を管轄する組織や関連団体とそれらの WaW タウンの間に、ウォーカー誘致を含む観光促進や地域振興に関して相互補完的でネットワーク型のような協力体制が生まれている。

本稿では、現在、英国各地の WaW タウンが、フットパスを活用したウォーカー誘致による地域振興において、国立公園や AONB とどのよ

うに協力、連携しているかについて2015年から2019年に実施した現地調査にもとづいて具体的な事例を挙げながら明らかにする。WaW タウンがそれぞれの市町村の範囲内だけでなく、自然保護地域を活用してより広域に活動を展開している状況について考察する。

I. 国立公園と WaW タウン

1. 英国の国立公園

(1) 特徴

英国の国立公園は、イングランドに10カ所、ウェールズに3カ所、スコットランドに2カ所の計15カ所ある (地図1)。それらは、すでに農耕、放牧、森林伐採、鉱山採掘などの人の手が入った地域を対象とし、土地所有権などが国にはなく、大部分が貴族などの私人、企業、自治体、組合などによって所有されている。つまり、英国では国立公園内に人々が生活し、生産活動を行っている。他国では、国立公園は保護地域であり、共有資源として国が所有管理し、村落などはそこに含まれないことが多い。

さらに、現在の国立公園制度は、1949年の国立公園とカントリーサイドアクセス法

表1：国立公園・AONB と WaW タウンの位置関係 (2019年7月現在)

自然保護地域	内部	近接*	近隣*	合計
国立公園	6	16	3	25
AONB	13	20	6	39
合計	19	36	9	64

注) *「近接」は国立公園までの距離が5 km 未満。

*「近隣」は国立公園までの距離が5 km 以上10km 以内。



地図 1：英国の国立公園

(National Parks and Access to the Countryside Act 1949: NPACA 1949) にその基礎をおいているが、同法はその後何度か改正された。国立公園の目的は以下の2点である。

1. その地域の自然の美、野生生物および文化的遺産を保全し、高めること。
2. 公衆がその地域の特別の質を理解し、楽しむための機会を推進すること。

国立公園設立の目的に自然資源や景観の保護と利用を掲げるのは世界各国に共通といえるが、「楽しむための機会の推進」とくに重視するところに英国の国立公園の特色がある(畠山ほか 2012: 2)。

また、諸外国の国立公園等の指定には、景観的特性とともに、公園資源の科学的・学術的価値が調査され、評価されることが一般的だが、英国の国立公園の指定には「美しい」という美的な評価が優先し²⁾、科学的・学術的な評価による自然資源の保護はまったく別の制度によってなされている。それが国指定資源保護区

(National Nature Reserve: NNR) や学術上とくに重要な保護地域 (Sites of Special Scientific Interest: SSSI) である(畠山ほか 2012: 3)。

(2) 運営組織と方法

英国の国立公園を所掌する中央行政組織は、とくに1990年代以降めまぐるしく改変されてきた。現在は、ナチュラル・イングランド (Natural England: NE) が所管行政機関となっている。NEは、2006年に設置され、「現在および将来の世代の利益のために自然環境が保全され、高められ、および管理されることが確保され、それによって持続的な発展に寄与すること」という目的をもつ。NEは、国立公園、AONB, SSSIの指定ないしは指定の助言、資金供与の権限を有し、NNRについては管理などの機能を有している(畠山ほか 2012: 76)。

現在、英国の国立公園は、公園ごとに国立公園庁 (National Park Authority: NPA) が管理している。NPAは、国の出先機関ではなく、公園ごとに設置された機関で、国が選任したメンバー、地方自治体が選任したメンバー、それに専任の行政スタッフからなる。NPAは、中央政府組織 (NE) からは完全に独立した機関とされ、国の直接干渉を受けない。しかも、地元市町村には強い発言権が認められているが、国立公園が存在する地方自治体の管理権限からは独立している。このように、NPAは独立性が高い機関であり、土地利用計画策定権限と開発許可権限をもち、国立公園全体を管理している(畠山ほか 2012: 3,11)。

NPAは、国立公園区域の管理について、地方計画行政機関と同等の権限をもち、州議会などからのコントロールを受けないとされているが(畠山ほか 2012: 78)、実際は後述するブレコン・ビーコンズ国立公園のように必ずしもそうではない。その管理には、自然の美などの保全、レクリエーション機会の確保だけでなく、地方団体の経済的・社会的福祉を考慮する必要がある、これらに対立するときは自然美等の保全が優先される(畠山ほか 2012: 78)。

推定で毎年1億1000万人がイングランドとウェールズの国立公園を訪れる。レクリエーションと観光が、訪問客と資金を公園にもたらし、それらが公園の自然保護業務を支え、また地元の雇用と産業を振興している。

(3) 国立公園と WaW タウンの位置関係

英国全土の15の国立公園のうち、8つの国立公園の内部や近くに25のWaWタウンがある。そのうち国立公園の内部に位置するWaWタウンは6、近接するものは16、近隣は3である(表1)。内部にWaWタウンがある国立公園は、ピーク・ディストリクト(Peak District)国立公園、エクスマア(Exmoor)国立公園、スノウドニア(Snowdonia)国立公園、ブレコン・ビーコンズ(Brecon Beacons)国立公園の4カ所のみであるため、国立公園に近いWaWタウン総数25から考えると少ないといえる(表2)。

25のWaWタウンの多くは国立公園にごく近い位置にあり、その自然環境とフットパスの恩恵にあずかっている。それらを活用してウォーカーを誘致し地域振興を目指そうとする市町村がWaWタウンの基準を満たし登録したといえる。

次に、3つの国立公園とその内部に位置するWaWタウンを取り上げる。公園と各NPAの運営や取り組みの特徴を踏まえた上で、それらのWaWタウンが、各々どのように公園やNPAと

関わり、フットパスを活用して地域振興に導いているのかについて聞き取り調査と参与観察にもとづいて具体例をあげながら述べる。

2. 国立公園内のWaWタウン

(1) エクスマア国立公園：ダンスター

①エクスマアNPAとフットパス

イングランドのサマセット州にあるエクスマア国立公園の面積は692km²で、湖水地方の4分の1ほどの広さである。同公園の3分の2はサマセット州に位置し、3分の1がデヴォン州である。公園内の人口は1万人で、公園の土地には王室所有地(Crown Estate)、ナショナル・トラストの所有地、そして合計2～3km²の個人農家の土地も含まれる。

エクスマアNPAには、80人の常勤職員がおり、土地計画チーム、レンジャー・チーム、教育チーム、自然環境・森の保全管理チーム、考古学チームに分かれている。その中でも、レクリエーションや観光といった側面が重視されている。エクスマア国立公園には年間200万人が訪れる。その4分の3がウォーキングに来ているという。同公園内には、180km²のアクセス・ランド(access land)³⁾があり、合計約1000kmのフットパスがある(Exmoor National Park 2016)。46本の長めのフットパス・ルートもあるので、この地域で1日から数日までのウォークが楽しめる。

表2：各国立公園(NP)とWaWタウンの位置関係

(2019年7月現在)

	国立公園名	内部	近接	近隣	合計
1	Yorkshire Dale NP	0	1*	0	1
2	Peak District NP	1	8	2	11
3	North York Moors NP	0	1	0	1
4	Exmoor NP	2	1	1	4
5	South Downs NP	0	1	0	1
6	Snowdonia NP	1	0	0	1
7	Brecon Beacons NP	2	3	0	5
8	Pembrokeshire Coast NP	0	1	0	1
	合計	6	16	3	25

注：* マークは、国立公園とAONBの間にある町。

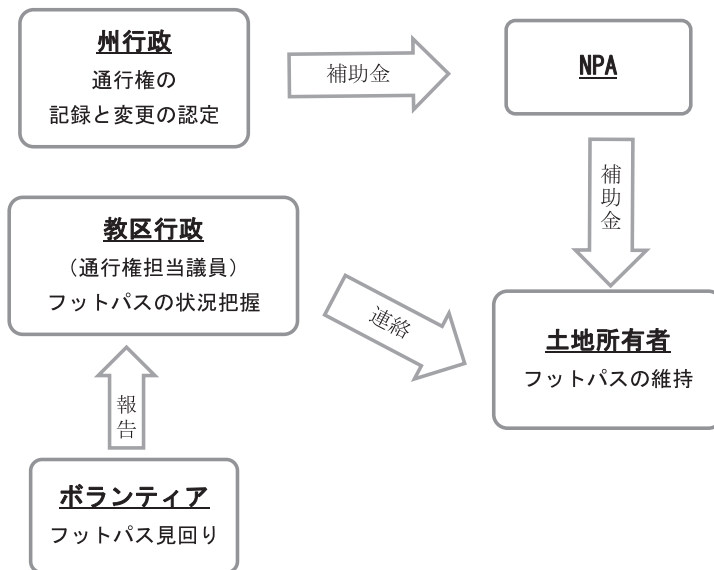


図1：フットパス維持管理の仕組み（エクスマア国立公園）

また、地域行政が設定した51マイル(81.6km)のロマン派詩人の道「コールリッジ・ウェイ」(Coleridge Way)が公園内を通っている(塩路2018:147-148)。さらに、エクスマア国立公園には、英国のナショナル・トレイルで最長の630マイル(1008km)に及ぶ南西イングランドの海岸沿いを一回りする「南西海岸パス」(South West Coast Path, 以下SWCP)の一部が通っている。そのため、公園内のWaWタウンは、フットパスの観点からいうと、NPAの職員だけでなく、同ナショナル・トレイル職員との連携も重要になってくる。

2000年から10年間、SWCPの議長を務めた男性は、SWCPは4億8千万ポンド(720億円)の地元への経済効果があるという。旅行ガイドブック『ロンリープラネット』が推奨したことで、SWCPを歩くのはオランダ人、ドイツ人、アメリカ人が多いという。元議長は、「サマセットのWaWタウンの町村には非公式のネットワークがある。ウォーキング・フェスティバルで互いの町村をつないで歩く。マーケティングの観点からWaWはとても重要なので、WaWタウンとしての基準を維持すべきだ」と語る。

彼は、ナショナル・トレイルを運営組織していた立場からWaWのコンセプトを支持し、地域でのWaWの必要性を明示した。

サマセット州知事によると、フットパスの通行権(Rights of Way)は州行政府が記録しており、ルート変更などは州行政府が認定するという。フットパスの維持は、土地所有者の責任となる。しかし、国立公園は州行政府から補助金を得ているため、それを国立公園内の土地所有者に提供できるという。サマセット州内のフットパスの状況把握は、教区(市町村)行政がその責任を担っている。そのため、州内の15のほとんどの教区行政には通行権担当の議員がおり、修理するゲートやスタイル(踏み台)などフットパスの状況を把握している。実際は、ボランティアが教区行政にフットパスの現状報告を行い、フットパスにゲートの修理等の問題があれば、教区行政の通行権担当議員が土地所有者に連絡するという流れである(図1)。ただし、SWCPは、国立公園よりも多くの資金があるため、国立公園内のナショナル・トレイルについては、トレイル職員がそうした維持管理をナショナル・トレイルの予算で行うという。



写真1：エクスマア国立公園内の王室所有地で情報交換するダンスター WaW の2人と同所有地のレンジャー、ナショナル・トレイル職員、元 SWCP 議長 (2016年8月筆者撮影)

②エクスマアNPAとダンスターのWaW活動

同国立公園内に位置し、サマセット州東部の人口800人の村ダンスター (Dunster) は、同じく公園内のWaW タウンであるポーロックやリントン、リンマスの村々と協力、連携体制をとっている。1村だけでは集客に限界がある村々がWaWタウンとしてだけでなく、観光案内所や国立公園ビジターセンターなどで相互に情報提供することで観光客を誘致し、連携している (塩路2018:146-147)。

ダンスターには、エクスマア国立公園内の3つのビジターセンターのうちの1つがある。ダンスターは小さな村だが、ビジターセンターがあるおかげで、NPAのスタッフと連絡が取りやすく、公園の入り口の村としての役割を担っているといえる。ダンスターのWaW活動メンバーは、NPAスタッフだけでなく、地方行政やナショナル・トレイル職員、王室所有地のレンジャーとも情報交換をしている (写真1)。それは、とくに公式な会議ではなく、非公式なものだが、それらのフットパスに関わる組織や団体をつなぐ媒介役となっている。WaW活動メンバーは、そうして公園内の開発案やレクリエーションとしての公園活用について理解し、

ウォーカーや観光客に適切なフットパス・ルートとその歩き方を伝えている。また、実際に案内したり、自らの宿泊施設でウォーキング・ツアーを実施したりしている。非公式の会合では、彼ら自身が住民であることから公園地域の開発問題について強い関心をもつ一方で、宿泊施設経営者でもあるため、訪れる人の目線に立ち、その要望を踏まえた上で、受け入れ地域として意見を言う場合もある。

地域にとって最も重要な権限として、NPAは住宅などの土地利用計画の策定権限と開発許可権限をもち、国立公園全体を管理していることは先述したが、60年以上ダンスターに暮らす村民によると、同村には近年別荘が増えているという。国立公園内という豊かな自然環境と村の歴史的景観が人気となり、住宅が高騰している。地元の若い世代の人々は村内に住宅を買うことはできず、仕事も村外である。そのため、村民はますます減少し、ロンドンなどの都市民が住宅を別荘として買ったり、旅行者向けのホリデー・コテージに改装したりすることが増えてきたという。このような状況はコミュニティにとって良いことではないと話す。WaW活動にとっても実際に人が暮らすコミュニティ自体

が縮小するとフットパスの維持管理すら危うくなる重要な問題である⁴⁾。

(2) ブレコン・ビーコンズ国立公園：タルガス

①ブレコン・ビーコンズNPAの観光促進とフットパス

ウェールズの南東に位置するブレコン・ビーコンズ国立公園は、面積1340km²、800m級の山々が連なった地帯である。西に「ブラック・マウンテン」と呼ばれる山があり、中央に「ブレコン・ビーコンズ」、東に「ブラック・マウンテンズ」と呼ばれる山々がある。公園の大部分は草地のヒースが多い荒野で、所々に森林もあり、谷間には牧草地が広がっている。

同公園は、7つの行政地域にまたがっている。それらは、統一行政 (unitary authorities) と呼ばれ、域内のフットパスを含む通行権の維持に責任がある。しかし、過去22年間、同NPAは、「サービス・レベルの同意」(Service Level Agreement) を7つの各行政地域と結んでおり、統一行政は公園に補助金を提供して同NPAが基本的には彼らのために通行権のある道を維持している。公園内のフットパスは1200kmに及ぶため、各地域行政は公園内まで通行権に関する人員を割くことができないからだという。

ブレコン・ビーコンズ国立公園には毎年500万人以上が訪れる。ウェールズとイングランドの境界線を通るナショナル・トレイル「オフアーズ・ダイク・パス」(Offa's Dyke Path)の一部が同公園の東端を南北に通っている。ビーコンズ・ウェイ (Beacons Way) という公園を東西に横断する全長159kmのフットパス・ルートもある。それは、公園協会メンバーの1人が2005年に立ち上げ、その後改良が重ねられたルートである。

ブレコン・ビーコンズ国立公園は、ウェールズに3つある国立公園の1つで、NPA内に観光課がある。他の2つの国立公園であるスノウドニアNPAとペンブロックシャー海岸 (Pembrokeshire Coast) NPAには観光課はな

い。それら2つの国立公園は、それぞれ1つの行政州内に位置しているため、その行政州の観光課がその州内の観光促進を担っているためである。一方で、ブレコン・ビーコンズNPAは独自に公園内の観光促進を対策する必要がある。ウェールズの観光促進を統括する組織である「ビジット・ウェールズ」(Visit Wales) に直接働きかけマーケティングを展開し、ロンドンのPR会社と契約して全国紙上でも同公園を宣伝している。また、地域の観光事業を共同で行う「観光目的地パートナーシップ・フォーラム」に参加している。そのフォーラムには、官民、非営利セクターから35の組織団体が参加し、そこで出資可能なプロジェクトを決めて実現する。例えば、「ユネスコのダークスカイ」(Dark Skies, UNESCO) はその一例である。同公園は、2018年にウェールズの観光目的地の第1位に選ばれた。

同NPAの観光課主任によると、同NPAはウェールズ政府からの補助金と、9つの近隣地域行政などの機関と警察から補助金を得ている。ポワイ (Powys) 行政州がこの公園内で最大の土地を占めているため、NPAはそこからの議員が多くなっており、彼らの公園への影響力は大きいという。しかし、それらの行政機関から公園運営のための人員や資材の提供はない。

実際の観光関係の業務については、同観光課主任が仕事をはじめた15年前の2003年には、NPAではビジネスをしているのがだれで、何を、どこで、どのようにしているかなど、全くわからない状態だったという。同主任は、最初にニュースレターを始め、徐々に公園内のビジネス・データを蓄積していった。ニュースレターとともに訓練コースも組織したことで公園内でビジネス経営する人々との関係を構築できたという。その中で、彼らが国立公園についてもっとよく知りたいという要望をもって、2010年から3日間の「アンバサダー・コース」を開始した。現在、同国立公園内の人々に地域を知ってもらう多様な訓練コースが実施されている。「アンバサダー・

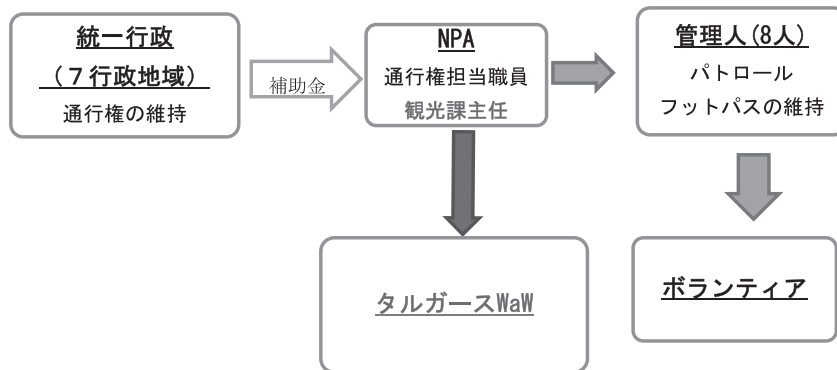


図2：フットパスの維持管理の仕組みと WaW グループ（ブレコン・ビーコンズ国立公園）

コース」には、最初は多くのB&B民宿経営者が参加し、次にウォーキング・ガイドの人々がより良いウォーキング機会を提供したいと考えて参加するようになったという。彼らは30代や40代の若い人々である。この8年間で283人がこのコースを修了した。ウォーキング・ガイドの人々は、真剣に長距離を歩くウォーカーが多く、それに役立つ別の資格をもっていることも多いという。

公園内のフットパスについては、NPAに通行権担当の職員 (Rights of Way officer) と8人の管理人 (warden) が雇用されており、管理人は主にパトロールとフットパスの維持を担当している。管理人の1人が主任として他の管理人の仕事をコーディネートし、通行権担当職員と共に働く。その下でボランティアの人々が働いている (図2)。しかし、広大な公園なので人手も足りないことから、仕事には優先順位がある。例えば、NPAが推進しているウォーキング・ルート上のフットパス上に問題があれば対処するが、推進しているルート上でなければあまり重要視されない。

②ブレコン・ビーコンズNPAとタルガースのWaW活動

ブレコン・ビーコンズNPAとWaW活動の関係は、EUの田園同盟 (Rural Alliances) の補助金で支援されたプロジェクトである「ツーリズム・イニシャティブ」の一部としてはじまっ

た。NPA観光課は、地元のコミュニティやビジネスと協働したいと考えており、そのためには地域にあった持続可能な観光戦略を発展させる必要があり、その1つの戦略がウォーキング・ルートだった。それが、公園内のWaW活動やグループがNPAと関わるきっかけとなった。NPA観光課はEUの田園同盟の補助金で公園内のWaWタウンの活動を支援した。公園内の町村でブランド化を望むところには、多様な小見出しのついた町のロゴを制作する支援もした。

タルガース (Talgarth) は、ブレコン・ビーコンズ国立公園の北東の端、ブラック・マウンテンズ北側の麓に位置する人口1600人の町である。2010年にタルガースの町議会がWaW活動に関する情報を得たことで、町の再活性化に熱心な2人の町議会議員がイングランドのウィンチコム (Winchcombe) に視察に出かけ、ウィンチコムWaWのメンバーがどのようにWaW活動を立ち上げ、町の活性化に成功したかを学んだ。彼らはタルガースに帰ってくると数名の住民をリクルートして委員会を作った。さらに、国立公園の関係者が、WaW UK ネットワークの会長を招待してそのグループに話をしてもらい、WaW活動の注意点と利点を知ったという。

当初、タルガースのWaW活動は、EUの田園同盟の補助金で賄われていたが、途中でその資金がなくなった。しかし、ブレコン・ビーコンズ国立公園の支援をうけながらタルガースWaWは自立できるようになっていた。タ

ルガースは、WaWタウン登録前の2012年にウォーキング・フェスティバルをすでに開催し始めていたため、それまでの6年間のウォーキング・フェスティバルの収入が資金源となって活動を支えることができたからである。その資金で「タルガース・ウォーキング・ガイド」という町周辺のフットパス・ルートを案内する冊子を出版した。

2018年現在、タルガース WaW の活動メンバーは12人から14人で、主要な運営を行う委員会メンバーは8人である。この中にウェールズ人は2名しかいないという。前委員長は、タルガースの商工会議所メンバーで、ウォーキングにも熱心だったため、最初に町議会議員からWaW委員会立ち上げメンバーとして依頼された人物である。前委員長は、現在B&Bを経営し、コミュニティの高齢者のためにミニバスをボランティアで運転している。彼はイングランド出身の73歳でタルガースには29年間暮らしているが、数年前にB&Bを始める前は長年エンジニアだった。

60代後半の現委員長は、ウェールズ人だがイングランドで育ち、この地域のパブリック・スクールに行った後、銀行業に携わっていた。退職後にタルガースに戻り、現在はチャリティ店を経営している。事務局長もウェールズ人で、現委員長と同じパブリック・スクールで友人だったという。彼はカーディフでウェールズ自然資源 (Natural Resources of Wales) の環境職員だったが、10年前に退職してタルガースに戻ってきた。彼は数百年間この地域に住んでいる一族でもある。亡兄の農地を受け継いで数軒の農家に貸しその管理をしているため、地元のウェールズ人の農家と親しく、かつ地域を熟知している。仕事で長年農家と接してきた彼は、ウェールズの農家は農業と牧羊だけでは生活が成り立たないという。彼らは建設業や羊の毛刈りなどの副業が必要だという。地元の農家はほとんどがウォーカーに対してフレンドリーだが、少数の農家が羊の妨げになるとして自分たちの農地を歩くウォーカーに反対していると

いう。彼自身は山登りが得意で、町の第1回目のウォーキング・フェスティバルではウォーキング・ガイドを務めて貢献した。委員会メンバーは、このほかにイングランド人の町議会議員、アメリカ人の図書館司書、ナショナル・トラストで働くアウトドアのインストラクター、ウェールズの統計局で働いていた人、会計士などである。

タルガースのWaW活動は、NPAの支援を受けながら立ち上がり、ウォーキング・フェスティバルの開催やフットパスのガイド冊子の作成販売などによって地域に定着している。WaWグループは現在もNPAの観光課主任を通して情報交換を続けている(図2)。タルガースWaWの活動メンバーは地域の自然環境に詳しく、農家の現状も十分理解した上で、ウォーカーを誘致することを考える姿勢が見られる。ウォークを行う際には、メンバーでルートを設定し、ルート上にある標識の確認作業を怠らない。広大な国立公園内でNPAのプロジェクトや観光促進戦略に合わせて、具体的なWaWの取り組みを積極的に町レベルで行っている。

(3) ピーク・ディストリクト国立公園：ブラッドフィールド

①ピーク・ディストリクトNPAとフットパス
 イングランド北部に位置するピーク・ディストリクト国立公園は、1951年に英国で最初に指定され、レイク・ディストリクト国立公園と同じく、中核的な公園であり、他の国立公園よりも先進的な政策を実現している存在でもある。公園の面積は約1438km²で、公園北部はダーク・ピークと呼ばれ、標高636mのキンダースカウトを最高地点とする丘陵台地にヒースや湿地からなるムーアの荒野が広がる。南部は、石灰岩の地質で、石垣に囲まれた農地や牧草地が続くホワイト・ピーク、サウスウェスト・ピークと呼ばれる地域が広がる。

『ピーク・ディストリクト国立公園マネジメント計画2018-23』によると、同公園には、年間1200万人以上が訪れる。公園内には1965年に指

定された最初のナショナル・トレイルである「ペナン・ウェイ」(Pennine Way)が南北に通っており、公園内のフットパスは計2080km以上に及ぶ。公園内の人口は約38000人で、行政州としてはダービシャー、ヨークシャー、スタフォードシャー、チェシャーの4つの州にまたがっている。ピーク・ディストリクトNPAのボードは11の地域行政から代表が集まり形成している。その意味では、NPAの運営は複雑で、WaWのメンバーもNPAの施策や対応が決まるまでの経緯はわからないと話す。フットパスの維持管理については以下に述べるようにNPAの職員が関わるが、観光政策については各行政州の観光課が担当しているため、国立公園として共通の観光政策があるわけではない。ただし、シェフィールドやマンチェスター、ダービーなどの都市が同公園から車で30分から1時間圏内にあることで、それらの都市からの訪問客が多く、その意味で同NPAは人種や年齢など多様な人々の公園利用をとくに促進している。

ピーク・ディストリクトNPAでは、1人の職員がアクセス担当職員 (Access officer) と通行権担当職員の役割を兼任して、国立公園内のフットパスの維持管理を担っている。同職員によると、アクセス職員としての役割は、地域に根ざしたエリア・アクセスを維持、向上させることだという。エリア・アクセスは、フットパスのような線状のアクセスとは異なり、アクセス・ランドのいかなる制限も管理し、同時にアクセス・ランドを楽しむ機会の促進をすることである。国立公園内の自然や野生の美しさ、文化遺産を保全することが第一目的なので、アクセス・ランドに行く人々が環境に影響を与えないように管理するという。この国立公園の3分の1以上がオープン・アクセスである (マネジメント計画2018-23)。レクリエーションの観点から、アクセスしやすい「何マイルもスタイルのない道」 ('Miles Without Stiles') のようなルートを進めるために、コミュニティと密接に関わりながら活動している。また、同NPAはアクセス改善のための資金も探している。より多く

の人々に使ってもらえるようなルート作りには、既存のルートをつなげたり、フットパスのない場所に新しい入り口を作ったり、乗馬や自転車のための新しいルートや既存のものをそれらにも可能にするなど、資金が必要になるからだ。

通行権担当の職員としての役割は、他の場所の同職員と同じだが、このNPAではとくにレクリエーション目的の自動の乗り物について道の表面への影響に注意しているという。過剰あるいは不適切な影響があれば、そういった乗り物に反対する行動をとることができる。例えば、注意書きの張り紙をそれらのルートに作ったり、道路の管轄行政とともに法的権利を明確化したり、さらにその道の利用権を取り下げるための法的プロセスをとることもできる。また、NPAは土地利用計画の策定権限と開発許可権限をもつため、フットパスのインフラを改善するために、土地所有者と相談しながら取り組んだり、フットパスのルートを変更すべきか検討したりもする。14のエリアに分けられた同国立公園の各地に配置されているレンジャー (ranger) が現地でその業務にあたる。レンジャーは、地域コミュニティとNPAをつなぐ役割をもち、フットパスを実際に現地で維持管理し、訪問者にサービスを提供するという業務を行っている (図3)。

②ピーク・ディストリクトNPAとブラッドフィールドのWaW活動

ピーク・ディストリクトNPAは、「何マイルもスタイルのない道」のルートを作成する際など、コミュニティと密接に連絡を取りながら仕事を進める場合、WaWグループと連携して最適なルートを決める。実際には、WaWグループとそのエリア担当のNPAレンジャーが連絡を取り合う。

ブラッドフィールド (Bradfield) は、人口5千人の村だが、面積は8030m²で、イングランドで最大の行政区 (civil parish) だという。同行政区は、多くの村や集落を含み、160kmを超えるフットパスがそれらの村々や史跡などをつなげ

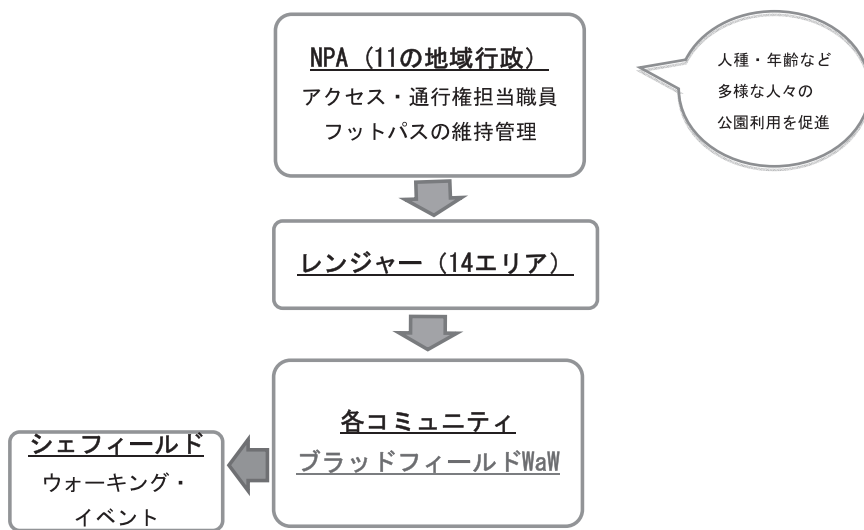


図3：フットパスの維持管理の仕組みと WaW グループ（ピーク・ディストリクト国立公園）

ている。同村は、公園の中でもシェフィールドにより近い位置にあるため、シェフィールドと連動したウォーキング・イベントや活動が多い。例えば、ブラッドフィールド WaW が、NPA の公園内コミュニティへの小規模補助金を得たイベントでは、2018年9月末に開催された「時を通して歩く：シェフィールドのウォーキング遺産」がある。それは、同年9月中旬に1週間開催されたシェフィールドのウォーキング・フェスティバルに連続するイベントとして設定された。シェフィールドとこの地域をウォーキングの目的地として促進し、オープン・アクセスの設立に貢献した地域だという歴史的背景に関する情報を提供するものだった。ブラッドフィールドのビレッジ・ホールで、展示、映画、音楽演奏、講演が催された。

2019年8月現在、ブラッドフィールドの WaW グループのメンバーは8人で、シェフィールドやこの地域出身者が多い。グループの事務局を担当する男性は、シェフィールド出身で、ブラッドフィールド隣村のストックスブリッジ WaW の委員長もしており、かつシェフィールドのローカル・フォーラムにも参加しているため、この地域を広域的に把握し地域づ

くりに関わっている。また、シェフィールド元市長もブラッドフィールド WaW のメンバーのため、行政対応やシェフィールド市との連携などもしやすい。さらに、グループの現委員長は元 NPA レンジャーなので、ブラッドフィールド周辺地域のフットパスの状況を把握しており、フットパスの維持管理についての NPA の取り組み方や決定方法も理解しているため、とても活動しやすいとメンバーは言う。例えば、実際にフットパスに関わる問題をレンジャーと相談して行動に移し、問題を解決してから NPA に報告し費用を申請するなど、WaW 活動をすばやく展開できるという(図3)。

ブラッドフィールドの WaW グループは、地元のパブや商店、ビール醸造所などの6つのスポンサーをもつ。WaW メンバーは、ウォーカーを含め、観光客が来ることでパブや商店などを維持できていることがこの地域での WaW 活動において重要だと話す。さらに、グループはそれらの商店の活性化や住民の増加も目的に入れて考えているので、公園内の開発問題にも敏感である。例えば、メンバーは地域に放置された穀物倉庫を開発するという業者が数回の建築計画申請の結果、許可が下りた件についても、実

Mar. 2020

英国におけるパブリック・フットパスと地域振興 (part 3)

際は何を建てるつもりか、もしかすると別荘的な集合住宅ではないかと議論する。

エクスマ国立公園でも同様の現象が起きていることは先述したが、ピーク・ディストリクト国立公園でも、ロンドンや周辺の都市から退職者が移住したことで、公園内の住宅価格が高騰し、公園内の低所得者や若者の住宅取得が困難となる事態が発生した。これらの問題を解決するために、行政が新築物件の使途規制や税金によって別荘やホリデー・コテージの増加を抑制しようとしているが、既存の建物の別荘化については規制するのは難しいという。しかし、NPA 職員のコミュニティ政策計画担当者によると、同公園内の別荘率が高い村でも13%程度なので、湖水地方やデヴォン、コーンウォールといった南海岸に比べると高くはないため、まだ深刻な問題ではないという。

しかし、住宅の高騰により、若者は生まれ育った土地を離れて公園外へ移住し、公園内の集落の人口が高齢化するという人口構成の変化と若者の労働力不足もある。同コミュニティ政策計画担当者によると、同公園では若者を誘致する施策は行っていないが、隣のヨークシャーデールズ (Yorkshire Dales) 国立公園では若い家族の移住を促進しているという。そこでは学校が閉鎖され活気の失われた小集落がいくつもあるため、若い人々の移住促進が必至だという。ピーク・ディストリクトNPAでは、周辺都市から人種や年齢など多様な人々の公園利用が多い特徴があり、かつそれを促しているため、それによって若い人々にも機会を与えていることになるという。

さらに、公園外に住む人々が公園内のオフィスに通勤することで観光客も含めた交通渋滞が生じている。実際、地域の公共交通機関は、本数が少なく連動性がない。改善策として、同NPAは夏の期間のみ3年間の試験的な試みだが、「探検バス」という公園内の主要な場所をつなぎ、公共交通機関と連動性があるバスを運行している。また、鉄道もマンチェスターとシェフィールド間の路線の本数を増やし1時間に1

本電車を走らせるようになったという。

公園内でも、「近隣計画」(neighborhood planning) と呼ばれる政策が促進されている。2011年に施行されたこの政策は、市町村などの地域行政または地域住民が要請する計画である。この地域で最初の法的な開発計画としてこの政策を実施したのは、2015年だという。しかし、政府がカントリーサイドの住宅不足を補う目的で住宅建設を強力に推し進めているため、現在、多すぎる住宅建設とその計画に各地で不満の声が上がっている。国立公園のすぐ外側でも同様の事態となっており、住宅建設という開発の圧力がせまっているという。公園内は、既存の集落に近い、地元の住民のためになるなど、ある特定の環境下でない住宅建設は許可されないNPAの戦略的な政策がある。その政策でいうと、例えば、公園内のベイクウェル (Bakewell) という町では、開発境界の内側は開発できるが、その外側は不可能である。開発境界の内部であっても、「緑の空間」(green space) は開発できない。緑の空間は、墓地や林地、パブリック・フットパスに続く土地など地域住民が重要と考える空間である。林地には通行権に関わる問題が多いので、緑の空間にも、フットパスがそこに通っているから開発できない、ということと同様の状況が働くという。

このように、ピーク・ディストリクト国立公園では、他の国立公園と比べると訪問客誘致や開発に対する先進的で異なる取り組みが見られる。その意味で、ブラッドフィールドWaWは、公園内の開発問題に注視しており、NPAのアクセス・通行権担当職員、コミュニティ政策計画担当職員、レンジャーを通して連携し、コミュニティを基盤にした活動を展開している。

II. AONBとWaWタウン

1. AONBとは

(1) 国立公園との違い

英国のAONBは、イングランドに33カ所、ウェールズに4カ所、イングランドとウェール

ズの境界に1カ所、北アイルランドに8カ所の計46カ所ある。AONBは、イングランドの15%、イングランドの海岸線の約5分の1を占める。年間に1億5600万人がAONBを訪れ、20億ポンド(3000億円)以上が消費され、地域の数千の雇用やビジネスを支えている(The UK's AONB)。

AONBは国立公園に準ずる自然保護地域であり、国立公園とほぼ同様の目的をもつ。国立公園の節で述べたそれらの目的が衝突するときは自然美の保全を重視する。目的の遂行にあたってはAONB内の地域コミュニティの経済的、社会的福祉を追求しなければならない点も国立公園と同様である。AONBの指定においては、生態系、社会、経済の持続性、環境の全体性、幅広い問題に対応した管理活動、パートナーシップによる協働からなる「統合された活動の必要性」が強調されており、国立公園と比べると、規制よりはパートナーシップなどを活用した協働的管理が重視されている(畠山ほか2012:85)。

AONBの管理組織は保全局(Conservation Board)で、AONBを所管する中央省庁はNCC(Nature Conservancy Council)である。NCCは、組織の総称で、イングランドではNE、ウェールズではウェールズ・カントリーサイド評議会、スコットランドではスコットランド自然遺産庁が該当する。NEは、AONBについて指定、文書の作成、地方計画行政機関の指導、地域への啓発活動や管理業務などの任務をもっている(畠山ほか2012:85)。保全局の設置は、2000年のカントリーサイド・歩く権利法(Countryside and Rights of Way Act 2000: CROWA 2000)によって定められた。それ以前は管理機関について特に定められていなかったため、大きなAONBでは管理機関が設置されていたが、多くの小規模なAONBは管理が地方自治体によって代行されるか、管理が放置されたという(畠山ほか2012:85)。

CROWA 2000は、大臣にAONB保全局の設置権限を付与し、保全局の権限を明記した。し

かし、保全局の設立は規模の大きなAONBのみに想定されているといわれる。保全局のメンバーは、それぞれのAONBごとに大臣命令によって定められるが、自治体の代表、教区(市町村)行政、大臣任命者などからなる。個々のAONBの管理は保全局が管理計画を作成し、実施する。管理計画は、関係機関や関係自治体に送付され、意見を聴取して必要な修正をした後、大臣の承認を得なければならない。一方で、AONB内の土地利用計画作成、計画許可、法執行などの権限は地方行政の計画審議委員会などにあり、保全局に移譲されたり分掌されたりすることはない。保全局は、自治体、組織、関連団体などとの連絡、協議、活動支援などにより目的の実現をめざすことが前提とされている(畠山ほか2012:85-86)。

(2) AONBの特色とWaW活動

上述したように、AONBは地域によって管理組織が異なり、協働的管理という特色があり、国立公園のように予算がひとまとまりに割り当てられない。そのため、近年AONBでは予算不足が常に問題となっており、限られた予算でAONBを管理することが求められる。

NPAは住宅などの土地利用計画の策定権限と開発許可権限をもち、その意味で自治的な権限があるといえるが、AONBの保全局には、そうした権限はなく、そのため国立公園と比べると保全には限界があるといえる。AONB内のそうした権限は地方行政にあるからである。その意味でもAONBでは、より一層パートナーシップによる協働的管理が重要になる。

以上のことから、AONB内のWaWタウンは、地域ごとの対応が必要になってくることがわかる。英国には46とAONBの数が多く、そのうち13のAONBの近くに39のWaWタウンが存在する(表1)。実際に、AONB内部のWaWタウンは8つのAONB中、13カ所である。それらにAONBに近接20と近隣6のWaWタウンを合わせると39カ所あり、これは全WaWタウン数の約3分の1にあたる。WaWタウンが内

部あるいは近くにある AONB をみても、丘陵地帯、高原平地、ヒースの荒地、海岸、谷など多様な自然環境があり、大小さまざまな AONB があることがわかる (表 3)。

39 の WaW タウンは、AONB 内部やごく近い位置にあり、その多様な自然環境を体験できるフットパスの恩恵にあずかっている。国立公園の場合とは異なり、39 の WaW タウンのうち 3 分の 1 の WaW タウンが AONB 内部に位置している。さらに、AONB には、ナショナル・トレイルを含む合計 12000 マイル (19200km) のフットパスとブライドル・ウェイがある。WaW タウンは、AONB の保全局やそれに相当する組織団体だけでなく、フットパスを実際に維持管理している団体やナショナル・トレイルの管理団体とも連携をはかる必要がある。

次に、AONB 内部に位置する WaW タウンと AONB に近い距離にある WaW タウンを取り上げる。それらの WaW タウンが、それぞれどのように AONB や保全局、トレイル管理団体やボランティアと関わり、AONB 内のフットパスを活用しているのかについて、聞き取り調査と参与観察にもとづいて具体例をあげながら述べ

る。

2. AONB 内の WaW タウン

(1) コッツウォルド AONB: ウィンチコム
コッツウォルド (Cotswold) AONB は、イングランド南西部に位置する丘陵地帯で、面積 2038km² と英国最大の AONB である。同 AONB は、7 つの行政州にまたがっているが、約 60 % がグロースターシャー州 (Gloucestershire) に含まれる。この AONB は、牧草地と麦畑の間に小さな町村が点在する美しい景観を保全しており、ロンドンからアクセスしやすいカントリーサイドとして人気の観光地でもある (塩路 2003)。また、コッツウォルド AONB には、北はチップピング・カムデン (Chipping Campden) から南はバース (Bath) まで 160km に及ぶナショナル・トレイルの「コッツウォルド・ウェイ」(Cotswold Way) のほぼ全長が含まれている。

コッツウォルド AONB には保全局 (Cotswold Conservation Board) が存在し、その管理運営を担っている。コッツウォルド保全局は、同 AONB 全体の植生管理や広報を行っている。

表 3: 各 AONB と WaW タウンの位置関係

(2019 年 7 月現在)

	AONB 名	内部	近接	近隣	合計
1	North Pennine AONB	2	1*	0	3
2	Nidderdale AONB	0	2	2	4
3	Lincolnshire Wolds AONB	0	2	0	2
4	Norfolk Coast AONB	1	0	1	2
5	Shropshire Hills AONB	1	5	2	8
6	Wye Valley AONB	1	2	0	3
7	Cotswold AONB	4	4	0	8
8	Mendip Hills AONB	1	0	0	1
9	Quantock Hills AONB	0	1	0	1
10	Cranborne Chase AONB	0	0	1	1
11	Chiltern Hills AONB	2	0	0	2
12	North Wessex Downs AONB	0	2	0	2
13	Kent Downs AONB	1	1	0	2
	合計	13	20	6	39

注: * マークは、AONB と国立公園の間にある町。

また、住民向けに石垣や生垣作り、タイル屋根葺き、鍛冶、森の間伐、薪炭作りといったコッツウォルズ地域の伝統技術 (Rural Skills) の講習と大会を定期的で開催している (山本ほか 2017: 29)。

実際にコッツウォルド・ウェイを含むコッツウォルズ地域のフットパスの維持保全の作業に取り組んでいるのは、コッツウォルド・ボランティヤ協会 (Cotswold Voluntary Wardens: CVW) の会員たち (warden) である。CVW は、保全局の補助金と技術支援のもとで活動するボランティヤ団体であり、約 330 人の会員をもち、その活動内容は充実しており、仕事の質が高いとの評価がある。CVW は、コッツウォルズ地域を 5 つのエリアに分けて活動している。さらに、各教区の担当会員がフットパスの管理として定期的なパトロールをし、簡単な整備作業や自治体への問題報告を行っている (山本ほか 2017: 29)。各エリアが委員会とワーキング・グループをもっており、フットパス上の雑草や枝の除去やコッツウォルド石の石垣の修復なども行う。CVW は、チップング・カムデンでは町の歴史的建築物を案内してまわるガイドウォークを実施しており、そのガイド役を担当する CVW 会員もいる。また、会員になると、保全局が実施するカントリーサイドの技術訓練の講習を無料で受講することができ、3 年毎にそのコースを受け直し、資格を更新する必要がある。

同 AONB 内の WaW タウンであるウィンチコムに関しては、WaW 活動の内容と町の変化について拙稿で度々取り上げてきた (塩路 2016, 2018)。ウィンチコムの WaW グループの委員長は、CVW の会員を 2005 年から続けており、伝統技術の講習も 3 年ごとに受けている。CVW のワーキング・グループの活動に参加している彼女は、そのネットワークからもより広域のフットパスの状況を把握している。彼女は、会員として CVW に報告することや地域行政に報告すること、さらに WaW グループとしてウィンチコムのフットパスを良好な状態に維持する

ための活動を WaW グループのメンバーと行っている。そのなかで、WaW グループとして保全局と連絡を取って情報交換したり、ウォークなどの WaW 活動の広報を依頼したりしている。AONB との関わりでは、WaW メンバーの多様な活動が重層的にネットワークを構築し、フットパスの維持管理と活用に機能しているといえる。

(2) ワイ谷 AONB: ロス・オン・ワイ

ワイ谷 (Wye Valley) AONB は、イングランドとウェールズの境界に位置するワイ川を中心にした低地で、面積は 326km²、ワイ川の下流域までの境界線はヘアフォード (Hereford) からチェプストウ (Chepstow) まで 92km あり、多様なフットパスをもつウォーキングに適した地域である。その景観は、北はワイ川の蛇行に沿って牧草地の広がるヘアフォードシャー州の低地から南は切り立った崖をもつ渓谷や森の斜面など対照的で、年間 230 万人の観光客を惹きつける (Wye Valley AONB)。また、ウェールズからイングランドへ抜けるナショナル・トレイル「オファーズ・ダイク・パス」や「ワイ谷ウォーク」(Wye Valley Walk) など長距離フットパスも通っている。

この AONB は、ウェールズのマンマスシャー州 (Monmouthshire)、イングランドのグロスターシャー州とヘアフォードシャー州 (Herefordshire)、フォレスト・オブ・ディーン (Forest of Dean) 行政府など、イングランドとウェールズの行政州や行政府にまたがっているため、コッツウォルド AONB のような単一の保全局はない。その代わりに、これら 4 つの行政が出資し、NE とウェールズ・カントリーサイド評議会の補助金で、共同諮問委員会 (Joint Advisory Committee, JAC) を形成し、その下でマンマス (Monmouth) に拠点をもつワイ谷 AONB ユニットという 5 人のスタッフの小さなチームが働いている。JAC の目的は、未来の世代のために地域の景観保全をする一方で、地元住民も訪問者もこの地域の恩恵を受けられ

Mar. 2020

英国におけるパブリック・フットパスと地域振興 (part 3)

ようにすることである (Wye Valley AONB JAC 2010)。

ワイ谷 AONB は、主にボランティアが景観と自然を保全する活動を行っている。ボランティアは、ワイ谷 AONB ユニットと協力して、石垣作り、植樹、生垣の手入れとフットパスの維持管理などを行う。2018年には、ワイ川祭りでティンターン寺院 (Tintern Abbey) までの巡礼路を整え、そのウォークの引率もボランティアが行った。

この AONB 内の WaW タウンとしては、イングランド側にロス・オン・ワイ (Ross-on-Wye)、ウェールズ側にチェプストウとマンマスがある。別稿でロスの WaW 活動については述べたが (塩路 2016 : 217-218)、ロスの WaW グループは、AONB という立地を生かして上記の 2 つの長距離フットパスだけでなく、全長 246km のヘアフォードシャー州の周遊型ウォークである「ヘアフォードシャー・トレイル」、29km のロスを周遊する「ロス・ラウンド」など、多様なウォークを紹介している。いずれのフットパスも部分的に短い距離を歩いて楽しむことができるものである。ヘアフォードシャー州には、2880km にも及ぶフットパスのネットワークがあるとされているが、その多くがロス地域に存在している。また、ロス WaW は、ワイ川沿いの道などにバギー・ルート (Buggy Route) と呼ぶ、車椅子やベビーカーなどを使う人々が安心して歩けるような道を 6.5km 以上作った。これらの道は、入口と出口のアクセス・ポイントも多く、標識もわかりやすく工夫されている。

ワイ谷 AONB のウェブサイトには「On Foot」のページがあり、多彩なウォーク用のパンフレットがダウンロードできるようになっている。そこに、WaW タウンのページも掲載するなど、歩く人向けの情報が AONB のサイトから直接アクセスできるように連携している。

3. AONB に近い WaW タウン

(1) ニーダーデール AONB に近いオトレイ
イングランド北部の町オトレイ (Otley) は、

町の中心からニーダーデール (Nidderdale) AONB まで約 1km という位置にある。このオトレイとバーレイ (Burley-in-Wharfedale)、バイルドン (Baildon) は、同 AONB に最も近い WaW タウンで、AONB に隣接してヨークシャーデール国立公園が北部に続いているという環境にある。2016年には、これらの 3 つの WaW タウンが、連携してそれぞれの町村をつないで歩く「ウェルカム・ウェイ」を作った (塩路 2016 : 148-149)。

なかでも、ニーダーデール AONB との関係では、オトレイの WaW グループが中心となって作った「6 つの谷のトレイル」(Six Dales Trail) がその活動と AONB との関係を表している。このトレイルは、オトレイを出発して、同 AONB を横断しながら 6 つの広い谷 (dale) を通ってミドルハム (Middleham) を終着点とする 61km の長距離フットパスである。同グループには、全国規模の団体であるランブラーズ協会 (The Ramblers' Association) と長距離ウォーカー協会 (Long Distance Walkers Association)、そしてオトレイのウォーキング・グループ (Otley Walkers) の会員が含まれていた。とくに、長距離ウォーカー協会の会員でもあるメンバーの 1 人は、このルートのガイドをするなど、ルート開発に多大な貢献をした。彼はルート完成後にウォークガイド『6 つの谷のトレイル』を書き、オトレイ WaW が 2010 年に出版し、現在まで 2 回重版を続けるほど人気で、その収益はオトレイ WaW の活動資金になっている。

同ルートの開発には、ニーダーデール AONB が補助金を出し、開発計画を同 AONB スタッフが完成まで支援した。長距離ウォーカー協会は計画費用に資金を援助し、リーズ地下鉄の交通計画担当者は公共交通機関と観光の側面から助言したという。北ヨークシャー行政州の通行権担当チームは標識作成や歩道橋の修理など専門的で実践的な技術支援をし、オトレイ町議会のコミュニティ開発職員も支援したという (Sparshatt 2016)。オトレイの WaW グループは、AONB を横切るフットパス・ルートを開発

するとともに、関連する行政や団体とうまく連携し、協力を得ていることがわかる。

(2) シュロプシャー丘陵 AONB に近いナイトン

ウェールズ東部のナイトン (Knighton) は、イングランドとの境界に位置する人口 3 千人の小さな町で、イングランドのシュロプシャー丘陵 (Shropshire Hills) AONB に近接している。同町には、ナショナル・トレイルのオフアーズ・ダイク・パスとグリンダース・ウェイ (Glyndwr's Way) が通っているだけでなく、多様なフットパスがある。

オフアーズ・ダイク・パスは、ウェールズとイングランドの国境線を行き来するナショナル・トレイルで全長 277km、8 世紀にオフアール王が作った防壁 (dyke) が部分的に残っており、それを辿りながら歩くルートである。同フットパスは、シュロプシャー丘陵 AONB の西端を通り抜ける。一方で、グリンダース・ウェイは、ウェールズのナショナル・トレイルで、ナイトンからウェールズ西側を周り、北部のウェルッシュプール (Welshpool) まで 216km あり、ウェールズの文化や歴史を楽しめるフットパスである。その他に、ナイトンには、2017 年 7 月に完成したハート・オブ・ウェールズ・ライン・トレイルという新しいフットパスやロス・オン・ワイから続く長距離フットパスも通っている。さらに、この地域には中世の家畜商人の道 (Drover's path) も多く残っている。

ナイトンの WaW グループは、7、8 人で構成されており、彼らは観光関係のグループにも所属し、その他の委員会にも入っているなど、コミュニティの中でも活動的な人々である。ナイトン WaW の現委員長は現役のグラフィックデザイナーだが、メンバーは委員長とほぼ同年齢で退職者が多い。事務局として活動する前委員長は元医者であり、メンバーには農政省の元役人、元ナショナル・トレイル職員など、インテリ階級の人々が活動を計画、実施している。とくに、同 WaW グループと密接な関係を築いて

いるのが、オフアーズ・ダイク協会とオフアーズ・ダイク・パスのナショナル・トレイル職員である。同協会の元トラスト員の 1 人が、ナイトンの WaW グループを立ち上げた女性で、現在は町で画廊兼喫茶店を営んでいる。ナイトンにはイングランドから移住する人々も多く、彼女の喫茶店を通して知り合いが増え、WaW 活動をはじめとして町の多様な活動に参加するようになる人も多いという。シュロプシャー丘陵 AONB には、オフアーズ・ダイク・パスが通るが、AONB 自体はイングランド側にあるので、ナイトン WaW は直接的な接触はあまりもたないが、同ナショナル・トレイルを通して関わっているという。

ナイトンはオフアーズ・ダイク・パスの中間地点であり、同パス上に存在する唯一の町である。そのため、ナイトンにはオフアーズ・ダイク・センターがある。1998 年に州行政が EU の補助金で設立し、現在もセンターを所有しているが、オフアーズ・ダイク協会が賃貸料を払い、運営を担っている。同協会は慈善団体のトラストだが、2010 年から自営で活動しており、同センターに補助金を得て観光案内所を設け、同協会が雇用した数名のスタッフが働く。収入源の 1 つにサポーター制があり、500 名の会員が払う会費はオフアーズ・ダイク・パスの維持保全にあてられる。同協会の委員長は別の場所で元ナショナル・トレイルの職員をしていた経歴があり、現在は引退してボランティアとして同協会でも働いている。同協会は、現ナショナル・トレイル職員と連絡を取り合い、トレイルの維持管理をしている。ナイトンの WaW グループは、同センターをウォークの始点や終点として活用し、同協会やトレイル職員と連携してウォークを実施する。また、彼らと情報交換してフットパスの状況を確認している。

オトレイやナイトンのように AONB に近い WaW タウンは、AONB 内部に位置する WaW タウンと比べると、AONB とともに活動するというよりも、長距離フットパスなどを介して AONB と関わる場合が多い。また、その場合は、

Mar. 2020

英国におけるパブリック・フットパスと地域振興 (part 3)

周辺の行政や関係機関、ウォーク関連団体、さらに長距離フットパスの維持管理団体と協力する傾向がある。

おわりに

これまでの論考で、WaWタウン内部に公式・非公式な形で協働の仕組みがネットワークのように生まれており、より広範囲でのWaW活動においてはWaWタウン同士を繋げる連携があることを指摘してきた(塩路 2016, 2018)。本稿では、そうしたWaWタウン同士の点と点の連携だけでなく、国立公園やAONBなどにおける広域の面的な連携があることを明らかにした。そのような広域においても、そこに関わる各組織や団体との公式・非公式な形のネットワーク的な協力体制によってWaW活動が成り立っている。その協力体制や関わり方は、各自然保護地域の自然環境や運営形態、その地域の行政体により、地域ごとに異なり、公的なものとして全国一律に存在しているものではないことがわかった。

国立公園がほぼ1つの行政体に占められている場合は、行政とNPA、さらにナショナル・トレイルなどが役割分担しながらうまくフットパスを維持管理、活用している。そのため、エクスマ国立公園内のダンスター WaWグループのように、非公式でそれらの関係諸団体をつなぐような媒介役になって、近隣のWaWタウンと連携している場合もある。しかし、プレコン・ビーコンズ国立公園やピーク・ディストリクト国立公園のように、複数の行政体にまたがる場合は、状況はやや複雑になる。前者はNPA内に活発な観光課があり、その支援によってタルガスWaWは立ち上がった。同NPAには通行権担当の職員と管理人も雇用されている。タルガスのWaWグループは同観光課と情報交換し、NPAの観光促進戦略に合わせて、ウェールズの農家の現状を把握しながらウォーキング・フェスティバルの開催やガイド冊子の作成販売などの活動を自立的に行っている。後者は、観

光政策については各行政州の観光課が担当しているため、国立公園としての共通の観光戦略があるわけではない。しかし、訪問客誘致や開発に対して先進的な取り組みをしている。フットパスに関しては1人のNPA職員がアクセスと通行権の担当を兼任しており、その下にレンジャーが配置されている。そのため、ブラッドフィールドのWaWグループは、同職員やレンジャーと密接な関係を構築してコミュニティ・レベルでWaW活動に取り組んでいる。

また、国立公園内のWaWタウンの活動においては、宅地建設などの開発問題がコミュニティを維持する上で重要な課題であることが明らかになった。NPAは住宅などの土地利用計画の策定権限と開発許可権限をもち、国立公園全体を管理しているが、都市部からの移住者の増加による住宅の高騰、既存の住宅の別荘化やホリデー・コテージへの転用は制限するのが難しく、公園内の人口の高齢化とコミュニティの空洞化を招いている。そのため、WaW活動においても、開発問題に注目しながら、多様な関係諸機関や団体と情報交換して連携する必要がある。

AONB内部に位置するWaWタウンは、AONB保全局やそれに相当するユニットや委員会と連携している。さらに、AONBの保全管理などのボランティア活動をする団体と密接な関わりを持ち、ウォークをより安全で充実したものにするために自分たちのWaW活動と連動させ、AONBにウォークやWaWタウンの活動の広報を依頼するなど、AONBの運営団体や関連団体と直接的な協力体制をもっている。一方で、AONBの近くに位置するWaWタウンは、AONB保全局と活動において連携するというよりも、それらの周辺環境を生かした長距離フットパスのルートを保全局の補助金で新たに開発したり、その地域のナショナル・トレイルの協会と関係を構築したりして、直接的、間接的に広域の連携を作り出している。

近年、英国における公的機関との関わりは、政府の経費や補助金などの削減、政策との関係

でそれらの機関が請け負う内容が変化したり担当者数が減少したりするなど、流動的でもある。その意味で、WaW活動を展開する上での広域の面的な協力体制については、今後も注視していく必要がある⁵⁾。

【付 記】

本研究は、JSPS 科研費 JP15K03067, JP15K03280 の助成を受けたものです。

注

- 1) 2019年7月現在、英国全土で105カ所のWaWタウンがある。内訳は、南イングランド25カ所、中央イングランド26カ所、北イングランド27カ所(仮登録1カ所を含む)、スコットランド8カ所、ウェールズ19カ所(仮登録2カ所を含む)である。
- 2) 畠山らも指摘するように、英国の国立公園の指定に美的な評価が優先することは、英国の自然保護運動にいたるロマン主義的な観点がある(畠山ほか2012:19-25)。そこには、18世紀に山や森などの自然に美的価値を付与し、風景として捉えたロマン主義的な概念としての「ピクチャレスク」の影響が考えられる。「ピクチャレスク」を求める画家や貴族たちは都市が発達するにつれて田園も美意識の対象にするようになり、その関心がカントリーサイドに向かった(塩路2003:43)。
- 3) アクセス・ランドとは、その範囲内において自由に歩き回れるエリアのことを指し、フットパスのような線状のルートに沿って歩かなくてもよいエリアをいう。
- 4) 同様の問題は、後述するコッツウォルド AONB でも起きている(塩路2003, Shioji 2018)。対策については、ピーク・ディストリクト国立公園の項で詳述する。一方で、サマセット州には原子力発電所が建設予定である。西サマセット行政府議員は、同発電所は地域に雇用を生み出し、より多くの資金と補助金を地域にもたらすと語る。地元の住民に仕事を提供し、地域に住むための手ごろな値段の住宅を建てることも可能になるという。
- 5) 筆者がこれまでに訪れた英国のWaWタウンの中には、国立公園やAONB以外に、企業などの民間が所有する自然保護地域や王室の所有地、全国規模のチャリティが運営する自然保護地域などがWaWタウン内部やその周辺にある場合もあった。

その場合も、WaWグループはそれぞれの自然保護地域の維持管理団体やレンジャーのような担当者との間に、公式・非公式な形で連絡・協力体制を構築している様子が見られた。

参考文献

- Exmoor National Park (2016) Rights of Way and Access Annual Reports 2015/2016.
- 畠山武道, 土屋俊幸, 八巻一成(編著)(2012)『イギリス国立公園の現状と未来: 進化する自然公園制度の確立に向けて』 北海道大学出版会。
- Peak District National Park (2018) Peak District National Park Management Plan 2018-23.
- 塩路有子(2003)『英国カントリーサイドの民族誌』 明石書店。
- 塩路有子(2016)「英国におけるパブリック・フットパスと地域振興 —Walkers are Welcome タウンの活動—」 阪南論集 社会科学編 第51巻 第3号, 213-221 ページ。
- 塩路有子(2018)「英国におけるパブリック・フットパスと地域振興 (part2) —小さな町村のWalkers are Welcome活動とウォーカーと関わる観光産業—」 阪南論集 社会科学編 第54巻 第1号, 145-155 ページ。
- Shioji, Yuko (2018) 'Who Makes "Old England" Home? Tourism and Migration in the English Countryside', in N. Frost and T. Selwyn (eds), *Travelling Towards Home: Mobilities and Homemaking*. Oxford: Berghahn, pp.77-104.
- Sparshatt, John (2016) The Six Dales Trail. Walkers are Welcome, Otley.
- The UK's AONB website
<https://landscapesforlife.org.uk/about-aonbs/aonbs/overview> (2019年6月)
- Walkers are Welcome website
<http://www.walkersarewelcome.org.uk> (2019年7月)
- Wye Valley AONB website
<http://www.wyevalleyaonb.org.uk> (2019年11月)
- Wye Valley AONB Joint Advisory Committee (2010) Walk This Wye.
- 山本裕実子, 深町加津枝, 柴田昌三(2017)「英国 Cotswold 地域における Rights of Way と National Trail の管理・運営」 ランドスケープ研究 (オンライン論文集) Vol.10, 26-30 ページ。

(2019年11月22日掲載決定)